

# 学童保育指導員の成長と研修体系の構築

## —子ども理解の力や実践構想力のさらなる発達のために—

### A Study on the Growth of Care Worker in After-School Care and the Construction of System of Study and Training

教育学部 船越 勝（ふなごし まさる）

**要約：**子ども・子育て支援新制度のスタートに伴って、和歌山県でも和歌山大学地域連携・生涯学習センターが中心になり、子育て支援員研修が2015年度から実施された。筆者は、放課後児童支援員に関わる放課後児童コースの研修に関わってきた。他方、筆者は、同じく和歌山県での放課後児童支援員の資格取得のための放課後児童支援員研修、さらによりレベルの高い一般社団法人日本学童保育士協会が主催する「学童保育士・基礎」資格取得のための研修も担当した。それらの経験から、学童保育指導員（放課後児童支援員）の成長のための研修内容の改善と体系化の必要について論じる。

**キーワード：**学童保育指導員、放課後児童支援員、専門性、研修体系

#### 1. 子ども・子育て支援新制度と学童保育指導員

##### (1) 子ども・子育て支援新制度とは

幼児期の学校教育や保育、地域の子育て支援の量の拡充や質の向上を進めるために、2015（平成27）年4月より、「子ども・子育て支援新制度」がスタートした<sup>1)</sup>。この子ども・子育て支援新制度は、私たち市民に最も身近な基礎自治体である市町村が中心となり、地域の子育て中の家庭の状況や、子育て支援へのニーズをしっかりと把握し、5年間を計画期間とする「市町村子ども・子育て支援事業計画」を策定し、実施することになっている。都道府県や国は、こうした市町村の取り組みを制度面や財政面（消費税率の値上げにより国及び地方の恒久財源から確保する）から支えるという制度設計になっているのである。

また、有識者、地方公共団体、事業主代表・労働者代表、子育て当事者、子育て支援当事者等（子ども・子育て支援に関する事業に従事する者）が、子育て支援の政策プロセスなどに参画・関与することができる仕組みとして、国に子ども・子育て会議が設置された。さらに、市町村等の合議制機関（地方版子ども・子育て会議）の設置も努力義務とされたのである。

##### (2) 子ども・子育て支援新制度と教育・保育の場の拡充

では、この子ども・子育て支援新制度で、具体的に教育や保育の場は、どのように拡充されたのだろうか。2012（平成24）年8月に成立した「子ども・子育て支援法」、「認定こども園法の一部改正」、「子ども・子育て支援法及び認定こども園法の一部改正法の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律」からなる子ども・子育て関連3法に基いて、新制度の主なポイントは、以下のような点にある<sup>2)</sup>。

①認定こども園、幼稚園、保育所を通じた共通の給付（「施設型給付」）及び小規模保育等への給付（「地域型保育給付」）の創設

この地域型保育給付は、とりわけ都市部における待機児童の解消とともに、子どもの数が減少傾向にある地域における保育機能の確保に対応するものである。具体的には、小規模保育、家庭的保育、居宅訪問型保育、事業所内保育である。

②認定こども園制度の改善（幼保連携型認定こども園の改善等）

これは、具体的には、幼保連携型認定こども園について、認可・指導監督を一本化し、学校及び児童福祉施設として法的に位置づけるとともに、認

定こども園の財政措置を「施設型給付」に一本化することをめざしたものである。

③地域の実情に応じた子ども・子育て支援（利用者支援、地域子育て支援拠点、放課後児童クラブなどの「地域子ども・子育て支援事業」）の充実

この地域子ども・子育て支援事業とは、教育・保育施設を利用する子どもの家庭だけでなく、在宅の子育て家庭を含む全ての家庭及び子どもを対象とする事業として、市町村が地域の実情に応じて実施していくというものである。具体的には、利用者支援事業、地域子育て支援拠点事業、妊婦健康診査、乳児家庭全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん事業）、養育支援訪問事業、子どもを守る地域ネットワーク機能強化事業（要保護児童等に対する支援に資する事業）、子育て短期支援事業（短期入所生活援助（ショートステイ）事業／夜間養護等（トワイライトステイ）事業、ファミリー・サポート・センター事業、一時預かり事業、延長保育事業、病児保育事業、放課後児童クラブである。

## 2. 子ども・子育て新制度と「子育て支援員」研修

### (1) 子育て支援員研修の趣旨

先にも指摘したように、2015年4月から子ども・子育て新制度がスタートし、新しい課題となっている地域保育型保育や、地域子ども子育て支援事業の担い手となる人材を確保していくために、そうした人材育成のための研修の実施が求められることになる。

そのために行われることになったのが、子育て支援員研修である。この子育て支援員研修の趣旨は、内閣府においては、以下のようにされている<sup>3)</sup>。

・子ども・子育て支援新制度において実施される小規模保育、家庭的保育、ファミリー・サポート・センター、一時預かり、放課後児童クラブ、地域子育て支援拠点などの事業や家庭的な養育環境が必要とされる社会的養護については、子どもが健やかに成長できる環境や体制が確保されるよう、地域の実情やニーズに応じて、これらの支援の担い手となる人材を確保することが必要。

・このため、地域において保育や子育て支援等の

仕事に関心を持ち、保育や子育て支援分野の各事業等に従事することを希望する者に対し、多様な保育や子育て支援分野に関しての必要な知識や技能等を習得するための全国共通の研修制度を創設し、これらの支援の担い手となる「子育て支援員」の養成を図る。

### (2) 子育て支援員とは

では、子育て支援員研修で養成する子育て支援員とは、どのような存在なのであろうか。厚生労働省は、子育て支援員の資質・能力、及び社会的役割と使命、養成と研修のあり方について、次のように規定している<sup>4)</sup>。

・国で定めた「基本研修」及び「専門研修」を修了し、「子育て支援員研修修了証書」（以下「修了証書」という。）の交付を受けたことにより、子育て支援員として保育や子育て支援分野の各事業等に従事する上で必要な知識や技術等を習得したと認められる者

・研修内容は各事業等に共通する「基本研修」と特性に応じた専門的内容を学ぶ「専門研修」により構成され、質の確保を図る。

・研修終了者を子育て支援員として研修の実施主体が認定。全国で運用。

・小規模保育等の保育分野や放課後児童クラブ、社会的養護、地域子育て支援など子ども・子育て分野に従事する

### (3) 子育て支援員研修のカリキュラムと基礎・専門科目—放課後児童コースを中心に—

このような子育て支援を養成するための研修カリキュラムは、基本研修が8科目で8時間とされ、専門研修は子ども・子育て支援新制度の内容に基づくコースによって異なる。具体的には、以下の表1と表2の通りである<sup>5)</sup>。

特に、本稿のテーマのかかわりのある放課後児童コースについて述べると、そのカリキュラムと科目、時間数は、①放課後児童健全育成事業の目的及び制度内容、②放課後児童クラブにおける権利擁護とその機能・役割等、③子どもの発達理解と児童期（6歳～12歳）の生活と発達、④子どもの生活面におけ



子育て支援員研修(基本・専門)科目(案)一覧①

基本研修	8科目 8時間	①子ども・子育て家庭の現状 (60分)	②子ども家庭福祉 (60分)	③子どもの発達 (60分)	④保育の原理 (60分)						
		⑤対人援助の価値と倫理 (60分)	⑥子ども虐待と社会的養護 (60分)	⑦子どもの障害 (60分)	⑧総合演習 (60分)						
放課後児童 コース	6科目 9時間	①放課後児童健全 育成事業の目的 及び制度内容 (90分)	②放課後児童クラブ における権利擁護と その機能・役割等 (90分)	③子どもの発達理解 と児童期(6歳～12 歳)の生活と発達 (90分)	④子どもの生活と 遊びの理解と支援 (90分)	⑤子どもの生活面 における対応等 (90分)	⑥放課後児童クラブ に従事する者の仕事 内容と職場倫理 (90分)				
社会的養護コース	9科目 11時間	①社会的養護の理解 (60分)	②子ども等の権利擁護、対象者の 尊厳の遵守、職業倫理 (60分)	③社会的養護を必要とする子ど もの理解 (90分)	④家族との連携 (60分)						
		⑤地域との連携 (60分)	⑥社会的養護を必要とする子ども の遊び理解と実際 (90分)	⑦支援技術 (60分)	⑧緊急時の対応 (60分)	⑨施設等演習 (120分)					
地域子育て支援コース	基本型	9科目 24 時間	①地域資源 の理解 (事前学 習) (480分)	②利用者 支援事業 の概要 (60分)	③地域 資源の 概要Ⅰ (60分)	④利用者支援 専門員に求め られる基本的 姿勢と倫理 (90分)	⑤記録 の取扱い (60分)	⑥事例分析Ⅰ ～ジェノグラムと エコマップを活用 したアセスメント ～ (90分)	⑦事例分析Ⅱ ～社会資源の 活用とコーディネ ーション～ (90分)	⑧まとめ (30分)	⑨地域資源 の見学 (480分)
	特定型	5科目 5.5 時間 (※)	①利用者支援事業の 概要 (60分)	②利用者支援専門員に 求められる基本的姿勢と 倫理 (60分)	③保育資源の概要 (90分)		④記録の取扱い (60分)		⑤まとめ (60分)		
	拠点	6科目 6時間	①地域子育て支援拠点 を全体像で捉えるための 科目 (60分)	②利用者理解 (60分)	③地域子育て支援 拠点の活動 (60分)	④講座の企画 (60分)	⑤事例検討 (60分)	⑥地域資源の連携 づくりと促進 (60分)			

※「利用者支援事業・特定型」については、自治体によって、実施内容に違いが大きい可能性があるため、地域の実情に応じて科目を追加することを想定。

表1 子育て支援員研修(基本・専門)科目(案)一覧①

子育て支援員研修(基本・専門)科目一覧(案)②

地域 保 育 コ ー ス	16 科 目 ／ 18 科 目  21 時 間 ／ 22 時 間 ＋ 2 日 以 上	共 通	12科目 15.5 時間	①乳幼児の生活と遊び (60分)	②乳幼児の発達と心理 (90分)	③乳幼児の食事と栄養 (60分)	④小児保健Ⅰ (60分)	⑤小児保健Ⅱ (60分)	
				⑥心肺蘇生法 (120分)	⑦地域保育の環境整備 (60分)	⑧安全の確保とリスクマネジメント (60分)	⑨保育者の職業倫理と配慮事項 (90分)	⑩特別に配慮を要する子どもへの対応 (0～2歳児) (90分)	
				⑪グループ討議 (90分)	⑫実施自治体の制度について(任意) (60～90分)				
		選 択	地域型保育	6科目 6～ 6.5 時間 ＋2日 以上	①地域型保育の概要 (60分)	②地域型保育の保育内容 (120分)	③地域型保育の運営 (60分)	④地域型保育における保護者への対応 (90分)	⑤見学オリエンテーション (30～60分)
				⑥見学実習 2日以上					
			一時預かり事業	6科目 6～ 6.5 時間 ＋2日 以上	①一時預かり事業の概要 (60分)	②一時預かり事業の保育内容 (120分)	③一時預かり事業の運営 (60分)	④一時預かり事業における保護者への対応 (90分)	⑤見学オリエンテーション (30～60分)
				⑥見学実習 2日以上					
			ファミリー・サポート・センター	4科目 6.5 時間	①ファミリー・サポート・センターの概要 (60分)	②ファミリー・サポート・センターの援助内容 (120分)	③ファミリー・サポート・センターにおける保護者への対応 (90分)	④援助活動の実際 (120分)	

表2 子育て支援員研修(基本・専門)科目(案)一覧②



る対応等、⑥放課後児童クラブに従事する者の仕事内容と職場倫理の6科目9時間である。基本研修の8科目8時間を加えると、14科目17時間が、放課後児童支援員の補助員の資格取得となる研修の内容となる。

#### (4) 子育て支援員研修に対する受講者の評価

和歌山大学が主催した和歌山県における子育て支援員研修は、毎回の研修の終了後、研修の成果を確かめるために、「効果測定」を行っている。2015年度から2017年度までの3年間の効果測定の結果を集約すると、基本的には研修参加者の評価は、高いものになっていると言える<sup>6)</sup>。

たとえば、2015年度の放課後児童コース和歌山会場の満足度に関わる評価結果は、「大いに役に立つと思う」が92.6%、「ふつう」5.9%、「その他」が1.5%となっており、研修内容は評価されていると言えるだろう。また、2016年度の放課後児童コース和歌山会場の満足度に関わる評価結果は、「大いに役に立つと思う」が95.3%、「ふつう」4.7%、2017年度の放課後児童コース和歌山会場の満足度に関わる評価結果は、「大いに役に立つと思う」が92.1%、「ふつう」7.9%となっており、3年間の放課後児童コースの研修は、基本的には成功であったといえることができるであろう。

#### (5) 子育て支援員研修の課題

ただ、記述式のアンケート結果を見てみると、子育て支援員研修の今後の課題も見えてくる。たとえば、2015年度子育て支援員研修放課後児童コースの記述式のアンケート結果には、次のような意見があった。

- ・内容から考えますともっと研修の時間、講義内容を増やしていただかないとこれで終了とは思えません。(どれだけ現場で生かせるか等考えますととても難しく思います。)
  - ・とても勉強になりました。ただ内容が濃いため時間が足りなく感じました。そこは残念です。
  - ・時間が1コマ、1時間半なので最後のところが急いでしまったのが、とても残念でした。内容をもっと聴きたい授業なので、これからも研修を受ける機会を創ってほしいです。
  - ・もっと時間をかけて学びたいと思いました。
- このように、研修時間や研修内容をさらに増やし

て欲しいという率直な意見も出されている。

また、研修方法についても意見も出されていた。

・事例やワークショップなどを行うことで、子ども理解の方法を学ぶことができた。事例研究(研修?)があると、具体的でためになったかと思えます。

・よその学童指導員さんと一緒にお話しをし色々お互いにそれぞれに学童の様子をお話しできて良かったです。参考になりました。

・ビデオなどで見せて頂いたりして、他の子どもたちの様子やもめごとの対処法など自分の考えを押しつけるのではなく子どもたち自身に考えさせるということも必要なのだとも思いました。

・現場の指導員の話とビデオは身近に感じられやっぱり子どもはかわいいなあと思いました。

このように、研修時間や研修内容だけでなく、具体的な現場の実践に基づいた研修へのニーズがあることがはっきりわかる。すなわち、学童保育指導員の専門性を高めていくためには、研修時間や研修内容の量的な拡大とともに、自分ならどのようにその子どもを理解するかとか、自分ならその場面でどのように対応するかなど、具体的な実践を元にした事例研究や参加者の意見交換が中心となるようなワークショップ型の研修を行うなどの研修方法の質的な発展が求められているのである。

### 3. 学童保育指導員の専門性と力量

#### (1) 学童保育指導員に求められる力量とは

子どもたちが学童保育に求めるものは何か。子どもたちが学校に求めるものが、学習、仲間、安心の

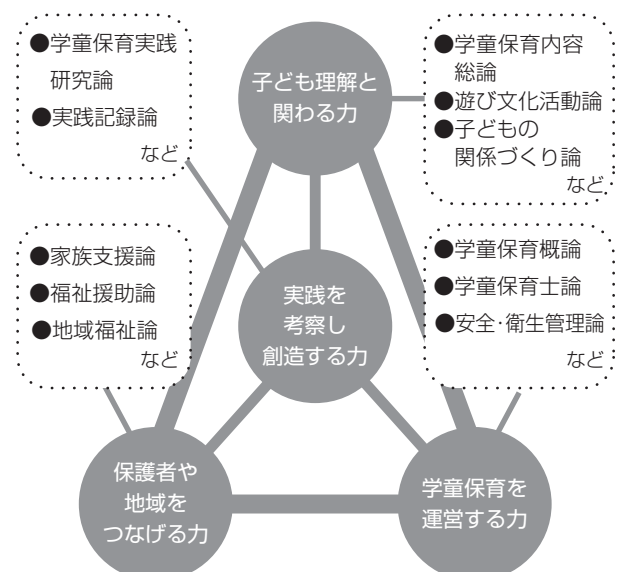


図1

日本学童保育士協会では、学童保育指導員に求められる専門的な力として、①子ども理解と関わる力、②保護者や地域をつなげる力、③学童保育を運営する力、そして、これらの中核に位置するものとして、④実践を考察し、創造する力という4つの要素から構想し、認証資格のカリキュラムとの関連を考えている<sup>7)</sup>。学童保育指導員の専門性の構造を検討していく上で、大切な指摘である。

筆者自身は、こうした構想にも学びながら、学童保育指導員の「専門的な知識と能力」が実践的知識や実践的能力に転化し、実践家としての力量となると考えている。そして、こうした学童保育指導員の力量を、実践的力量と組織的力量という2つの力量から構想している。まず「実践的力量」について見てみると、それは①学童保育実践知、②学童保育実践能力、③学童保育実践観の3つの側面からなっている。第一の「学童保育実践知」は、子どもの発達やそのすじみち、さらには現代の子どもが置かれている状況や抱えている課題などについての実践的知識である「子ども知」、そうした子どもたちに文化として媒介していくべき保育内容としての「保育内容知」、こうした保育内容を子どもたちに伝えていく手立てとしての「保育方法知」、最後に、このように、子どもに実践を通して関わっていく学童保育指導員としての自分自身について自己認識である「自分知」の4つからなっている。

他方、学童保育指導員の「組織的力量」に関しては、未だ十分構造化できていないが、学童保育実践が個人で行う実践と言うよりも、常にチームで行う実践という性格から、職場の同僚とカンファレンスを通して、子ども理解と分析を共有し、協働で実践を展開しながら、専門性を高め合っていく「同僚性」に関する知識と能力、保護者や地域住民、専門機関との「連携と協働」に関する知識と能力、最後に、管理職に限定されず、自らの職場をみんなの力で自主



的に運営していく施設運営に関する知識と能力の3つからなっている。

それらをまとめると、以下の図2のようになる<sup>8)</sup>。

#### 4. 放課後児童支援員研修での受講者の学び

##### (1) 放課後児童支援員研修のカリキュラム

では、放課後児童支援員の養成に関わる放課後児童支援員研修のカリキュラムは、どのようになっているのか。具体的には、「放課後児童支援員に係る都道府県認定研修ガイドライン」に基づいて見てみると、その項目は、放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）の理解、子どもを理解するための基礎知識、放課後児童クラブにおける子どもの育成支援、放課後児童クラブにおける保護者・学校・地域との連携・協力、放課後児童クラブにおける安全・安心への対応、放課後児童支援員として求められる役割・機能の5項目からなり、科目は、①放課後児童健全育成事業の目的及び制度内容、②放課後児童健全育成事業の一般原則と権利擁護、③子ども家庭福祉施策と放課後児童クラブ、④子どもの発達理解、⑤児童期（6歳～12歳）の生活と発達、⑥障害のある子どもの理解、⑦特に配慮を必要とする子どもの理解、⑧放課後児童クラブに通う子どもの育成支援、⑨子どもの遊びの理解と支援、⑩障害のある子どもの育成支援、⑪保護者との連携・協力と相談支援、⑫学校・地域との連携、⑬子どもの基本的な生活面における対応、⑭安全対策・緊急時対応、⑮放課後児童支援員の仕事内容、⑯放課後児童クラブの

運営管理と職場倫理の16科目24時間である。

それらの項目・科目及び時間数をまとめると、以下の表3のようになる<sup>9)</sup>。

##### (2) 放課後児童支援員研修のカリキュラムと子育て支援員研修放課後児童コースのカリキュラムの比較

先の子育て支援員研修の放課後児童コースのカリキュラム、科目・時間数と比較すると、まず時間数が放課後児童支援員研修のカリキュラムが24時間（16科目）であるのに対して、子育て支援員研修放課後児童コースのカリキュラムは、17時間（14科目）と7時間、2科目少ない。

また、カリキュラムの内容面を見てみると、放課後児童支援員研修のカリキュラムの科目である①放課後児童健全育成事業の目的及び制度内容、⑤児童期（6歳～12歳）の生活と発達、⑬子どもの基本的な生活面における対応の3科目は、子育て支援員研修放課後児童コースのカリキュラムの、①放課後児童健全育成事業の目的及び制度内容、③児童期（6歳～12歳）の生活と発達、⑤子どもの基本的な生活面における対応と、科目名や時間数が共通しているが、それ以外の科目は、複数の科目が統合されたり、簡略化されたりしている。特に、放課後児童支援員研修のカリキュラムの科目である⑪保護者との連携・協力と相談支援、⑫学校・地域との連携、⑭安全対策・緊急時対応の3科目の内容が、子育て支援員研修放課後児童コースのカリキュラムでは位置

放課後児童支援員に係る都道府県認定研修の項目・科目及び時間数		別紙
1. 放課後児童健全育成事業(放課後児童クラブ)の理解【4. 5時間(90分×3)】	① 放課後児童健全育成事業の目的及び制度内容 ② 放課後児童健全育成事業の一般原則と権利擁護 ③ 子ども家庭福祉施策と放課後児童クラブ	
2. 子どもを理解するための基礎知識【6. 0時間(90分×4)】	④ 子どもの発達理解 ⑤ 児童期(6歳～12歳)の生活と発達 ⑥ 障害のある子どもの理解 ⑦ 特に配慮を必要とする子どもの理解	
3. 放課後児童クラブにおける子どもの育成支援【4. 5時間(90分×3)】	⑧ 放課後児童クラブに通う子どもの育成支援 ⑨ 子どもの遊びの理解と支援 ⑩ 障害のある子どもの育成支援	
4. 放課後児童クラブにおける保護者・学校・地域との連携・協力【3時間(90分×2)】	⑪ 保護者との連携・協力と相談支援 ⑫ 学校・地域との連携	
5. 放課後児童クラブにおける安全・安心への対応【3時間(90分×2)】	⑬ 子ども基本的な生活面における対応 ⑭ 安全対策・緊急時対応	
6. 放課後児童支援員として求められる役割・機能【3時間(90分×2)】	⑮ 放課後児童支援員の仕事内容 ⑯ 放課後児童クラブの運営管理と職場倫理	
		合計 24時間(16科目)

表3 放課後児童支援員に係る都道府県認定研修の項目・科目及び時間数



付けが弱いように思われる。

### (3) 放課後児童支援員研修における学びと学童保育指導員としての成長

筆者は、担当した放課後児童支援員研修において、講義だけでなく、限られた時間のなかではあるが、ビデオ映像等を活用して、事例研究的に講義を行ったり、簡単に話し合いのためのグループを作成して、意見交換を中心としたワークショップ型の運営を一部取り入れたりしていた。

そして、この放課後児童支援員研修には、毎回レポート課題を出すことになっているのであるが、筆者は自らの実践についての実践記録の執筆を展望しつつ、研修で学んだ知識や技能を自分の実践に当てはめて、自分の実践をリフレクションする事例研究型の課題を出すようにしてきた。

たとえば、2017年12月3日に行われた放課後児童支援員研修紀北会場のレポート課題は、次のようなものを課した。筆者の担当した④子どもの発達理解について研修では、「自らの施設の『気になる子ども』を一人取り上げ、その子どもの発達理解を研修の話をもとに具体的に述べなさい」とし、⑤児童期(6歳～12歳)の生活と発達についての研修では、「自らの施設の『気になる子ども』を取り上げ、その子どもの生活づくりと支援の方針について具体的に述べよ」とした。

#### 事例1 (Nさん)

現在2年生の男の子Nくんは、1年生の2学期まで児童相談所で過ごしていて、家に帰ることになって学校に入って、学童にも通いはじめました。特にこれといって気になることはなかったのは2週間くらいで、生活にも慣れてきたのか、ワガママを言い自分の要望が通らなければ泣きさけんで、外に飛び出し暴れる毎日になりました。勉強はできないわけではないのに、したくないからしない、嫌いだからしない。このおもちゃは自分が気に入っているから誰にも渡さない、船越先生が話されていた「だからの論理」そのものです。Nくんがあまりにも無茶なワガママを言うので、「Nくんは、嫌いだけど今日は頑張ってみようって思わない?」と聞いてみたら、「僕そんなこと思ったことない。だって嫌いなもの

は嫌いやもん。」と言われました。父子家庭でネグレクトの疑いで児童相談所に連れて行かれ約半年間、父と姉と離れて過ごしたNくんは情緒障害のかんじがありました。それ故、「だからの論理」から「けれどもの論理」にまだなっていないんだと思いました。あれから1年と少し経て、先日Nくんがとび出して行った後、私に「嫌やったから出ていきたくて出ていったけど、勝手に出て行ったらあかんから信号までで我慢した」と言ってきました。遅れながらも心の成長が見受けられたようで、Nくん頑張れ!と心で応援しています。

この事例1のレポートは、④子どもの発達理解について研修のレポートして出されたもので、この研修の講義で、幼児後期(4歳半から小学校2年生あたりまで)の発達課題として、4歳半の節越えとして「けれども行動」の獲得について説明したことと関わっている。「けれども行動」の獲得という言葉は、いわば専門的知識である。しかし、このままでは実践的にわかりにくいと考え、「『だからの論理』から『けれどもの論理』への移行」という言葉で補足説明をしている。これは、4歳半の節越え以前子どもが、「～嫌いだから絶対しない」とか、「～は好きだから絶対やる」とか言うように、自分の感情と行為を「だから」という接続詞でつないで、自分の感情をそのままストレートに表現している状態であるのに対して、「けれども行動」を獲得し、4歳半の節越えをした子どもは、「～は嫌いだけれども頑張ってみる」とか、「～は大好きだけれども我慢する」と言うように、自分の感情に振り回されないで、自分の感情をコントロールすることができる内面の育ちの状態へと発達していくのであり、私たち学童保育指導員はその過程を深く理解し、支えていくなかかわりが必要だということを理解してもらいたいと思って、使った言葉である。いわば専門的知識が実践的知識や実践的能力に転化して行くことをねらった言葉の選択だったのである。

それをNさんは、レポート執筆の過程で、自身の放課後児童クラブのN君のケースに当てはめ、N君のこの1年と少しの間の成長を「『だからの論理』から『けれどもの論理』への移行」という言葉で解釈し、整理したのである。しかし、大事なのは、このレポートのなかには、紙数の関係で十分書き込ま

れていないが、N君が「勝手に出て行ったらあかんから信号まで我慢した」と「けれども行動」を獲得することができたのは、HさんがF君の側に居て、揺れ、葛藤するF君の内面を支え続けたからである。また、その過程で、F君とHさんの信頼関係が構築されていったからこそ、Nさんの支援がN君の成長を支える意味ある行為となったのである。

このように見てくると、レポート執筆を通して、Nさんは、専門的知識としての「けれども行動」の獲得という言葉は、『だからの論理』から『けれどもの論理』への移行』という言葉を経由にして、実践的知識や実践的能力へと高めていったように思われ、Nさんの学童保育指導員の実践的力量的の形成につながっていったように考えられるのではないかな。

次の事例2、事例3のレポートは、⑤児童期（6歳～12歳）の生活と発達についての研修のレポートとして出されたものである。この研修の講義のなかで、児童期の生活づくりの課題として、個と集団をつないでいく集団づくりの実践の大切さを述べたのであるが、学童保育指導員の対応によっては、個と集団はますます切り離され、相互に抑圧と排除の関係になっていくのに対して、学童保育指導員が、たとえ大きな課題を抱えている子どもであっても、頭ごなしに否定せず、一人一人の子どもの持ち味や個性を発揮する役割や出番を実践的に作り出し、そのことを集団の前で認め、集団に投げ返していくなかで、個と集団は相互に理解し、支え合っていく関係になっていく。筆者は前者の関係を「抑圧のトライアングル」と言い、後者を「発達（促進）のトライアングル」と呼んで、「抑圧のトライアングル」から「発達のトライアングル」へと関係性を発展させていくことの重要性を説明したのである。

次の2つのレポートは、このことを受け止めて作成されたものである。

## 事例2（Hさん）

私の放課後児童クラブに、共働きで近くに祖父母もいない為毎日放課後児童クラブを利用する3年生のF君がいます。F君はコミュニケーションをとるのが苦手で、勝ち負けにこだわります。なので毎日のようにトラブルが起こります。一年生の時は上級生の女子が、よく遊んでくれました。二年生になり同学年の子と遊ぶようになりました。しかし、F君

の怒る様子を面白がってわあと怒らす子が出てきました。支援員はF君がカッとなり楽しい遊びの時間をこわしてしまうので、つい皆の前で叱ったり、「お母さんに友達と喧嘩した事を伝えます」と思わず言ってしまいました。まさに抑圧のトライアングルで悪い方にいくばかりでした。F君にとって支援員はお母さんに悪い事を言いつける人となっていきました。これではいけないと、まずF君と信頼関係をつくっていくため、トラブルの多い子だという先入観を捨てること。F君とささいな事でも笑顔で会話をする。お母さんにはF君の前で頑張りや、やさしいところをどんどん話していきました。三年生になりF君も少しずつ感情をコントロールできるようになってきました。またお母さんの表情も明るくなってきました。お家でもゲームばかりしていたそうですが、家族で公園に行ったり近くの神社に行くそうです。今後もクラブの子どもたちの発達のトライアングルを目指して集団づくりの指導していきたいと思います。

## 事例3（Mさん）

子どもの発達理解のレポートでも取り上げた1年生のM君について引き続き書きたいと思う。3年生の兄が、不登校で母親は兄に注意を向ける事が多いので、自分を認めてほしいという欲求が強い。自分を否定するような言葉を言うこともあるので、自己肯定感は低いと感じる。

私たち指導員がM君の支援で心がけることは、まず、どんなささいな事でもよい面を見つけ、M君の自信につながるような言葉をかけていくことだと思う。周りと比べるのではなく、以前のM君と比べて、成長していると感じることを伝えていく。実際、学習の時は、前に比べて集中して取り組めることが多くなってきたように思う。それと、友達関係は前より広がり、仲良くできる子が増えてきたと感じる。

「発達のトライアングル」サイクルというものを今回教えていただいた。気になる子どもは、問題があることも多いので、どうしても「抑圧のトライアングル」になりがちだ。しかし、発達のトライアングルでは、指導員が気になる子どもの良さが発揮できる機会を意識的に創り、肯定的な評価を行うことから始まっていく。M君の良さ、たとえば活潑な面や運動が得意な面、また周りをよく見ている敏感



なところを指導員として評価し、認めていきたい。そして集団の見方がその子に寄り添い、支えになっていくように、指導員として支援していきたい。

事例2のHさんは、自身の放課後児童クラブのF君に対する対応を、研修で「抑圧のトライアングル」と「発達のトライアングル」という言葉と出会うことで、F君にとって言えば、抑圧のトライアングルだったのではないかと振り返ることができたのである。だからこそ、F君との関係を見つめ直して、「まずF君と信頼関係をつくっていくため、トラブルの多い子だという先入観を捨てること。F君とささいな事でも笑顔で会話をする」というように、F君との肯定的な関係の構築にシフトチェンジしていった。また、その後の母親との対応でも、「お母さんにはF君の前で頑張りや、やさしいところをどんどん話していきましょう」というように、お母さんとF君の関係が抑圧のトライアングルではなく、発達のトライアングルになるように、F君の肯定面を返していくようにしていったのである。つまり、学童保育指導員としての対応が、この言葉と出会うことで、F君の発達促進になるにはどうしたらいいかを考える視点にもなったということができる。

同様に、事例3のMさんも、この「抑圧のトライアングル」と「発達のトライアングル」という言葉と出会うことで、「M君の良さ、たとえば活発な面や運動が得意な面、また周りをよく見ている敏感なところを指導員として評価し、認めていきたい。そして集団の見方がその子に寄り添い、支えになっていくように、指導員として支援していきたい」と学童保育指導員のこれからの子どもたちへの対応のあるべき姿を改めて確認することができたのである。

このように、放課後児童支援員研修など、研修で学んだことを自らの実践に当てはめて応用してみることは、ただ単に知っているだけでなく、「活用型の能力」になっていく。言い換えると、研修で学んだ専門的知識や能力が実践的知識や実践的能力へと転化し、学童保育指導員の実践的力量的形成につながり、専門性を高めていくことになるのである。そういう点で、研修の課題としてのレポートのあり方を再検討していくことは、もっとも簡単な研修のあり方の改善につながるのではないだろうか。

## 5. 学童保育指導員の専門性と力量を高めるための研修の体系化

### (1) 学童保育指導員の研修を量的質的にさらに発展させていくために

「学童保育士・基礎」資格改訂認証カリキュラム（1開講日＝基本6時間授業 1時間は60分）

授 業 科 目 名	内 容 項 目
教育福祉論Ⅰ・Ⅱ (6時間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育学の基礎的な知識</li> <li>・現行の教育政策について</li> <li>・社会福祉の基礎的知識と政策の現状</li> <li>・現行の社会福祉政策について</li> <li>・学童保育は教育・福祉を結合している施策であることについて</li> </ul>
社会福祉論 (3時間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会福祉制度の変遷について</li> <li>・現行の社会福祉政策の現状と課題について</li> <li>・権利としての社会福祉について</li> </ul>
児童福祉論 (3時間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童福祉の変遷について</li> <li>・児童福祉政策の現状と課題について</li> <li>・権利としての児童福祉について</li> </ul>
学童保育概論 (3時間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現代社会の子育ての状況と学童保育の目的・役割について</li> <li>・子どもの権利と学童保育の役割について</li> <li>・学童保育の歴史について</li> <li>・児童福祉法における学童保育の位置づけ</li> <li>・学童保育における法制度について</li> </ul>
学童保育士論 (3時間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学童保育指導員の職務内容と専門性</li> <li>・学童保育指導員のおかれている現状</li> <li>・学童保育指導員の倫理</li> <li>・職務における指導員の連携</li> </ul>
学童保育内容総論 (3時間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学童保育における保育計画の意義・作成について</li> <li>・学童保育における保育目標・保育内容について</li> <li>・学童保育における総括・評価</li> </ul>
遊び・文化活動指導論 (6時間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学童期の子どもの遊び・文化活動の意義</li> <li>・学童期の子どもの遊び・文化活動の指導</li> <li>・学童保育の遊び・文化活動に関わる実技</li> </ul>
子どもの関係づくり論 (6時間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども理解の基本的な視点（共感的理解や発達要求としての理解）</li> <li>・学童保育における集団づくりの指導</li> <li>・子ども理解と集団づくりのケーススタディ</li> </ul>

特別支援論Ⅰ・Ⅱ (6時間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身体障がい、発達障がいなど様々な障がいの理解</li> <li>・困難な養育環境に置かれた子ども理解</li> <li>・障がいを持つ子どもをサポートするための連携</li> </ul>
学童保育における食と安全・衛生管理論 (3時間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学童期の健康、食の問題と生活習慣</li> <li>・食物アレルギーの子どもへの配慮すべきことや緊急時への対応について</li> <li>・救急対応や災害時・緊急時の対応</li> <li>・施設運営の安全衛生の整備と維持</li> </ul>
地域福祉論 (3時間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の社会資源の活用とネットワークづくり</li> <li>・学校との連携や協働のあり方</li> <li>・子どもの発達と地域環境</li> </ul>
家族支援論 (3時間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者理解（共感点理解について）</li> <li>・子育て・就労に関わる公的扶助の活用</li> <li>・伝え合い・気づきあうための方法と技能</li> <li>・家族支援のケーススタディ</li> </ul>
学童保育実践研究論 (3時間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学童保育指導員の専門性とその形成</li> <li>・指導員による実践研究と専門的力量形成の関係について</li> <li>・実践研究の内容・方法について</li> </ul>
実践記録論 (3時間) ＊現場実習 12時間	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学童保育指導員の専門的力量形成における実践記録作成とその意義</li> <li>・実践記録の作成 (実践記録の書き方を学び、自らの実践記録を作成する)</li> </ul>
計 54時間＋現場実習 12時間	

表4 「学童保育士・基礎」資格改訂カリキュラム

筆者は、これまで述べてきた和歌山県における子育て支援員研修放課後児童コースや放課後児童支援員研修に関わってきたが、もう一つ和歌山県で行われている一般社団法人日本学童保育士協会が主催する「学童保育士・基礎」資格取得のための研修も担当してきた。これは、16科目54時間である。(表4)

この研修は、表5にあるように、現在学童保育指導員の資格認定に関わっている他のNPOとも協議が行われ、3団体の共通カリキュラムが設定されるようになってきている。これは、16科目48時間である<sup>10)</sup>。それに独自科目2科目6時間を加えて、18科目54時間である。これは、放課後児童支援員

「学童保育士・基礎」カリキュラム 大阪会場

	科目名	内容項目	日程	講師	時間数
統一科目	社会福祉概論	・社会福祉制度の歴史の変遷／・社会福祉政策の現状と課題／・権利としての社会福祉	2017 10/1 (日) 午前	加美嘉史 (佛教大学)	3
	児童福祉概論	・児童福祉の歴史の変遷／・児童福祉政策の政策の現状と課題／・権利としての児童福祉	2017 10/1 (日) 午後	奥野隆一 (大阪保育研究所)	3
	実践記録論	・学童保育における記録・省察の意義と方法／・実践記録を書くことの必要性和重要性	2017 10/15 (日) 午前	二宮衆一 (和歌山大学) (協会代表理事)	3
独自	学童保育実践研究論	・学童保育指導員の専門性とその形成／・指導員による実践研究と専門的力量形成の関係について／・実践研究の内容・方法について	2017 10/15 (日) 午後	二宮衆一 (和歌山大学) (協会代表理事)	3
統一科目	学童保育概論	・学童保育の目的・役割／・子どもの権利と学童保育／・学童保育の歴史／・児童福祉法における学童保育の位置づけ／・学童保育における法制度／・放課後の施策等	2017 11/26 (日) 午前	石原剛志 (静岡大学)	3
	学童保育士論	・学童保育指導員の職務内容と専門性／・学童保育指導員のおかれている現状／・学童保育指導員の倫理／・教師・保育士の資格制度(専門性の法的根拠)	2017 11/26 (日) 午後	石原剛志 (静岡大学)	3
	学校教育概論	・学校とはなにか／・生存権と教育権／・学習指導要領／・学校経営／・教育制度・行政	2017 12/10 (日) 午前	久田敏彦 (大阪青山大学)	3
	学童保育内容総論	・学童保育の生活とは／・学童保育における保育計画の意義・作成／・学童保育における保育目標・保育内容／・学童保育における総括・評価	2017 12/10 (日) 午後	竹中真美 (滋賀県指導員)	3
	食・健康・衛生	・学童期の健康、食の問題と生活習慣／・食物アレルギーの子どもへの配慮すべきことや緊急時への対応について／・救急対応や災害時・緊急時の対応／・施設運営の安全衛生の整備と維持／・健康・生活習慣	2018 2/18 (日) 午前	三上かおる (栄養士)	3
	子育てネットワーク論	・地域の社会資源・子ども組織の活用とネットワークづくり／・学校との連携や協働のあり方／・子どもの発達と地域環境	2018 2/18 (日) 午後	志藤修史 (大谷大学)	3
	遊び・文化の指導	・学童期の子ども遊び・文化活動の特徴・意義／・学童期の子ども遊び・文化活動の指導／・学童保育の遊び・文化活動に関わる実技	2018 3/4 (日) 午前	代田盛一郎 (大阪健康福祉短期大学)	3
独自	遊び・文化の指導Ⅱ	・学童期の子ども遊び・文化活動の特徴・意義／・学童期の子ども遊び・文化活動の指導／・学童保育の遊び・文化活動に関わる実技	2018 3/4 (日) 午後	代田盛一郎 (大阪健康福祉短期大学)	3
統一科目	指導・支援方法論	・指導・支援・管理／・共感・応答／・ソーシャルワーク／・実践の組み立て方及び実践研究の内容・方法について／・学童保育指導員の専門性とその形成	2018 4/22 (日) 午前	船越勝 (和歌山大学)	3
	生活と集団づくりの方法	・自治的な生活づくりに取り組む集団の指導／・仕事の指導／・自治活動・自治組織／・権利行使主体	2018 4/22 (日) 午後	船越勝 (和歌山大学)	3
	家族支援論	・伝え合い・気づきあうための方法と技能／・子育て支援(制度)の実際／・子育て・就労に関わる公的扶助の理解	2018 5/20 (日) 午前	中野加奈子 (大谷大学)	3
	困難な養育環境にある子どもの理解と援助	・困難な養育環境におかれた子ども理解／・貧困、虐待、異文化など社会福祉の対象についての基礎的な理解	2018 5/20 (日) 午後	伊部恭子 (佛教大学)	3
	子どもの発達の基礎的理解	・乳幼児期の子どもの発達／・学童期前半の発達／・学童期後半の発達／・思春期	2018 7/1 (日) 午前	野村朋 (大阪健康福祉短期大学)	3
	障害をもつ子どもの理解と援助	・身体、知的、精神及び発達障害など様々な障害の理解／・障害を持つ子どもをサポートするための連携／・保護者理解	2018 7/1 (日) 午後	野村朋 (大阪健康福祉短期大学)	3

表5 「学童保育士・基礎」カリキュラム 大阪会場



## 【参考1】

## 保育士等の資格等取得に必要な履修科目について

保育士			社会福祉士			小学校教諭			
(資格取得方法) 指定保育士養成施設で所定の課程・科目を履修し卒業、 又は保育士国家試験に合格			(資格取得方法) 福祉系4年制大学卒業等(指定科目履修)、社会 福祉士養成施設卒業等、社会福祉士国家試 験に合格			(教員免許状取得方法:一種免許状) 大学等で学士の学位等の基礎資格を得て、かつ所定の教 科及び教職に関する科目の単位を修得し免許状を取得			
科目名		単位数	科目名		時間数	科目名		単位数	
教養科目 (8以上)	外国語(演習) 体育(講義) 体育(実技) その他	1 1 1 1	●人体の構造と機能及び疾病 ●心理学理論と心理的支援 ●社会理論と社会システム		30時間 30時間 30時間	教科に関する科目 (8)	国語(書写を含む。)、社会、算数、 理科、生活、音楽、図画工作、家 庭及び体育の教科に関する科目 のうち一以上	8	
必修科目	①保育の本質・ 目的に関する 科目(13)	保育原理(講義) 教育原理(講義) 児童家庭福祉(講義) 社会福祉(講義) 相談援助(演習) 社会的養護(講義) 保育者論(講義)	2 2 2 2 1 2 2	○現代社会と福祉 ○社会調査の基礎 ○相談援助の基礎と専門職 ○相談援助の理論と方法 ○地域福祉の理論と方法 ○福祉行政と福祉計画 ○福祉サービスの組織と経営 ○社会福祉 ○高齢者に対する支援と介護保険制度 ○障害者に対する支援と障害者自立支援 制度	60時間 30時間 60時間 120時間 60時間 30時間 30時間 60時間 30時間 30時間	教職に関する 科目(41)	・教職の意義及び教員の役割 ・教員の職務内容(研修、服務 及び身分保障等を含む。) ・進路選択に資する各種の機 会の提供等	2	
	②保育の対象の 理解に関する 科目(12)	保育の心理学Ⅰ(講義) 保育の心理学Ⅱ(演習) 子どもの保健Ⅰ(講義) 子どもの保健Ⅱ(演習) 子どもの食と栄養(演習) 家庭支援論(講義)	2 1 4 1 2 2	○低所得者に対する支援と生活保護制度 ○保健医療サービス ■就労支援サービス ■権利擁護と成年後見制度 ■更生保護制度 ○相談援助演習 ○相談援助実習指導 ○相談援助実習	30時間 30時間 15時間 30時間 15時間 15時間 90時間 180時間	教育の基礎 理論に関する 科目	・教育の理念並びに教育に関 する歴史及び思想 ・幼児、児童及び生徒の心身 の発達及び学習の過程(障 害のある幼児、児童及び生徒 の心身の発達及び学習の過 程を含む。) ・教育に関する社会的、制度的 又は経済的事項	6	
	③保育の内容・ 方法に関する 科目(14)	保育課程論(講義) 保育内容総論(演習) 保育内容演習(演習) 乳児保育(演習) 障害児保育(演習) 社会的養護内容(演習) 保育相談支援(演習)	2 1 5 2 2 1 1	※科目・時間数は一般養成施設における カリキュラム。 ※福祉系4年制大学等においては、上記 ○の科目に加え、●から1科目、■から1 科目を選択して履修。	30時間 30時間 15時間 30時間 30時間 15時間 15時間	教育課程及び 指導法に 関する科目	・教育課程の意義及び編成の 方法 ・各教科の指導法 ・道徳の指導法 ・特別活動の指導法 ・教育の方法及び技術(情報機 器及び教材の活用を含む。)	22	
	④保育の表現技 術(4)	保育の表現技術(演習)	4	○相談援助演習 ○相談援助実習指導 ○相談援助実習	150時間 90時間 180時間	生徒指導、 教育相談及 び進路指導 等に関する 科目	・生徒指導の理論及び方法 ・教育相談(カウンセリング)に 関する基礎的な知識を含む。) ・理論及び方法 ・進路指導の理論及び方法	4	
	⑤保育実習(6)	保育実習Ⅰ(実習) 保育実習指導Ⅰ(演習)	4 2			教育実習 教職実践演 習	5 2	5 2	
	総合演習(2)	保育実践演習(演習)	2			教科又は教職に関する 科目(10)	上記のうちいずれかの科目 又は上記に準ずる科目	10	
	選択必修科目	保育に関する科目(上記①～⑤の系列より科目設 定)	6以上			その他修得が必要な科 目	・日本国憲法 ・外国語コミュニケーション ・情報機器の操作	8	
		保育実習Ⅱ又はⅢ(実習) 保育実習指導Ⅱ又はⅢ(演習)	2 1			介護等体験	七日間の介護等体験	-	
	合計			合計		1,200時間	合計		67.7
	又は 保育士国家試験			かつ 社会福祉士国家試験					

表6 保育士等の資格等取得に必要な履修科目について

研修の倍以上の時間である。また、本稿で指摘して  
きた学童保育指導員の専門性や力量を高めていくた  
めに重要な意義を持つ、事例研究や実践記録の執筆  
と検討、あるいはグループワークの活用などのワー  
クショップ型の研修などが多様に行われている。

しかし、内閣府や厚生労働省などでも検討されて  
いるように<sup>11)</sup>、この学童保育士・基礎資格取得の  
ための研修でも、保育士や社会福祉士、小学校教諭  
の資格取得と比較すると、まだまだ量も質も検討課  
題は多い。(表6)

## (2) 研修の体系化の視点

現在、和歌山県で行われている子育て支援員研修、  
放課後児童支援員研修、学童保育士・基礎資格取得  
のための研修という3つの研修をより有機的に結び  
つけていくためには、それぞれがどのような固有の  
ミッションを持っているかをまずは明確化すること  
が必要であろう。

その点で、先に紹介した学童保育指導員の力量の  
構造をもとに考えると、子育て支援員研修は、学童  
保育実践知を形成する土台となる専門的知識の基礎  
を学ぶことが中心になる。次に、放課後児童支援員  
研修は、学童保育指導員に求められる専門的知識と

能力を身につけながら、それを学童保育実践知や学  
童保育実践能力に転化するいくつかの視点を獲得す  
る。そして、学童保育士・基礎資格取得のための研  
修は、それらの専門的知識を本格的に学童保育実践  
知や学童保育実践能力へと高め、専門性の基礎と実  
践的力量を獲得していくものにしていく。

これらの視点をもとにしながら、研修の体系化を  
図るべく、さらなる検討が必要だといえよう。

## 注

- 1) 内閣府「よくわかる『子ども・子育て支援新制度』」参照。  
(<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/sukusuku.html>)
- 2) 内閣府「子ども・子育て支援制度」  
(<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/outline/index.html>)
- 3) 内閣府「『子育て支援員』研修について」(資料6-1)  
(<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/administer/setsumeikai/h270123/pdf>)
- 4) 同上。
- 5) 同上。
- 6) 詳細は、本研究年報所収の村田和子論文を参照されたい。
- 7) 一般社団法人日本学童保育士協会 HP 参照。  
(<http://gakuhoshi.com/>)
- 8) 拙論「専門職としての学童保育指導員の学びと成長—実践研  
究を中心とした研修の視点から—」『学童保育研究』第18号、  
かもがわ書店、2017年参照。
- 9) 厚生労働省「放課後児童支援員に係る都道府県認定研修ガ  
イドライン(案)の概要」(<http://www.mhlw.go.jp/file105-shingikai-11901000-koyoukintoujoudokateikyoku>)
- 10) 一般社団法人日本学童保育士協会 HP 参照。
- 11) 厚生労働省、同上。